

**日本科学者会議****福岡支部ニュース**

No. 296

2026年2月24日発行

**●日本科学者会議事務局**〒113-0023 東京都文京区向丘 1-1-17 タカサキヤビル5F  
Tel: 03-5615-9032 Fax: 03-5844-6513**●福岡支部事務局**〒813-0021 福岡市東区みどりが丘 3-11-5  
小早川義尚 気付け

&lt;E-mail&gt; fukuoka@jsa-fukuoka.sakura.ne.jp

&lt;郵便振替&gt; 福岡 01790-1-5576

<支部HP> <http://jsa-fukuoka.sakura.ne.jp/>

## 目次

## ページ

1	日本科学者会議 60 周年記念「九州沖縄シンポジウム」(1/24) 参加報告 「戦争に向かわせない, 平和を築く私たち」(第1部:九州・沖縄からの レポート、第2部:平和をどう創造できるか～戦争体験と博物館と私～)	1
2	福岡核問題研究会 1 月例会 (1/17) の報告 「原子力防災について」	3
3	第 31 回 JJS オンライン読者会 (2/7) に参加して 『日本の科学者』1 月号の記事【「市民と科学者を結ぶ」ためにいま必要 なこと -宮本憲一氏に聞く】に関連して (ゲスト=宮本憲一氏)	4
4	第 3 回 AI 問題研究会 (2/28) のご案内 「AI の現状と問題を, メンバーが得た情報や体験を踏まえて話し合う」	5
5	第 56 回日本科学者会議 (JSA) 福岡支部定期大会 (5/17) のお知らせ	6
6	(エッセイ) 『トルコの旅より』 (河内俊英)	6

**1. 日本科学者会議 60 周年記念「九州沖縄シンポジウム」参加報告**

1月24日(土)の午後, 標記のシンポジウムが対面(琉球大学会場)およびオンライン(Zoom)で開催され, 40数名が参加した。シンポジウムのテーマは「戦争に向かわせない, 平和を築く私たち」で, 第1部(九州・沖縄からのレポート)と第2部(「平和をどう創造できるか～戦争体験と博物館と私～」)の2部構成で行われた。

第1部では3名の方からの講演があった。最初は, 宮崎県平和委員会の藤田元義氏から「宮崎県の軍備増強 新田原基地 F35B 戦闘機配備, えびの駐屯地長射程ミサイル配備」について報告された。宮崎県には6つの自衛隊基地・駐屯地が存在し, それぞれの特徴・役割や配備されている装備や施設について説明があり, 問題点を指摘された。例えば, 航空自衛隊新田原基地には昨年, 臨時 F35B 飛行隊(仮称)が発足し, 短距離離陸, 垂直着陸可能なステルス戦闘機 F35B が配備されている。垂直着陸時は, 騒音が激しく時間も長いので, 住民から訓練を強行しないでほしいという声が上がっている。また, 米国防総省の2018年度年次報告

書には同機の欠陥が指摘されており、また米本土での墜落事故もあり、1機222億円もする同機の配備には多くの危険性が伴う。また、新田原基地では昨年3月に基地の井戸から国の暫定目標値の11倍のPFAS（有機フッ素化合物）が、基地周辺の民家の井戸から18倍のPFASが検出され、問題となっている。また、PAC3（地对空誘導弾システム）などの展開訓練のために基地の拡張が予定され、用地取得が計画されている。

また、陸上自衛隊のえびの駐屯地では、2026年度に大型弾薬庫5棟の建設と長射程ミサイル「高速滑空弾」の配備、運用部隊の新設が予定されている。昨年11月に平和委員会は、学習会や地元住民との懇談会を開催して、この問題を宣伝し、反対組織の結成を目指している。講演を通して宮崎県においても政府・自民党が進める大軍拡・防衛力増強の実際に進行している状況がよく理解できた。

二つ目の講演は、元佐賀大学理工学部教授の豊島耕一氏による「戦争を予防し警察も変える非暴力直接行動—佐賀空港軍事化反対運動と弾圧について—」というテーマで発表された。佐賀空港へのオスプレイ配備の経緯と反対運動について紹介され、特に2023年6月に防衛省が佐賀駐屯地建設工事を着工した際、住民・市民が自発的な阻止直接行動、2024年1月の直接行動の再開以降の「早朝行動」の状況が説明された。その後非暴力直接行動の意義・効用および国内外での非暴力直接行動の紹介があった。工事ゲートでのダンプ阻止行動の参加者の不当逮捕の状況について写真を交えて詳しく報告された。豊島氏が、「非暴力」の重要性とともに「阻止行動の参加者は、阻止行動の現場で遭遇するすべての人に対して、敬意を持って接しなければならない。」と述べられたことが印象的であった。

第1部の最後は、JSA 平和問題研究委員会の亀山統一氏から「浦添新軍港の建設はやめよう—海を守ろうという平和運動—」というテーマでの講演であった。米軍那覇港湾施設は1974年に移設条件付での全部返還が日米両国政府間で了承され、1995年に浦添ふ頭地区への移設が両国政府間で合意された経緯がある。以後那覇軍港の無条件返還および浦添「移設」反対の県民運動の長い歴史が始まる。那覇軍港は、狭いうえに水深が浅いため、大型船が入れない、クレーンなどの設備もないのであまり利用されていない。浦添への「移設」というより、沖縄の基地機能に欠けている巨大軍港を新設するというのが実態である。反対運動の当初は「環境」についての意識は低かったが、近年、浦添「移設」に伴う自然・環境破壊の問題がクローズアップされてきた。2023年に浦添軍港案を両政府が合意し、翌24年に環境アセスメント準備書、25年に環境アセスメント方法書が公表された。亀山氏が世話人「浦添西海岸の未来を考える会」はこの「方法書」には「埋立による土地造成後に軍港として使用されたときの環境影響の評価が一切含まれていない」ことを指摘し、沖縄県環境部に「軍港をアセスに入れるように事業者求める」ことを申し入れた。このように那覇軍港の浦添「移設」反対の県民運動は平和運動と地域、環境の取り組みを結合して進められている。

沖縄県の米軍基地の負担軽減というスローガンと実態の乖離を改めて考えさせられる講演であった。

第2部では、佐喜眞道夫氏（佐喜眞美術館）から、「アートと戦争」、西由良氏（「あなたの沖縄」代表から「日常から沖縄戦を語り継ぐ～体験していない私たちにできること～」）、鈴木陽子氏（沖縄愛楽園交流会館）から「見えなくされた人々の沖縄戦とその後」、平良次子氏（対馬丸記念館）から「平和学習の意義と博物館の役割」の発表が行われたが、その内容・感想については紙面の都合で割愛する。多様な観点・立場から「平和と戦争」を考える良いシンポジウムであった。

（報告者：出口博之）

## 2. 福岡核問題研究会 2026年1月例会(1/17)の報告

講演者：北岡逸人 氏(非会員、元新潟県柏崎市議)

講演題名：原子力防災について

福島原発事故により原子力防災の中身は変貌し、より多くの住民などに多大な苦難(被害・損失)を強いて住民などの犠牲的な協力を当然とする、憲法違反の恐れがあるものに改悪されつつあります。特に、被曝の影響が大きい妊婦(胎児)に対する放射線防護が全く考慮されていないことが問題で、原子力災害と他の災害が同時におきた場合、原子力防災の実行が困難か不可能になる問題などがあります。

何より福島原発事故で原子力防災の前提が、原発などの過酷事故はおきない(漏れる放射能が少ない)から過酷(重大)事故は起こる(大量の放射能が漏れる)に大きく変えられました。そのため、原子力防災の対象地域は大幅(原発から半径8~10kmから30kmの範囲)に拡大されてしまいました。

そもそも、原発などの立地する自治体や住民は(大事故は起きないので)安全だから受け容れたし、原子力防災は(避難が必要になる大事故は起きないので)安心のための備えでした。それが、大事故がおこる危険性があったから原子力防災は拡充するに変わり、原発などの立地しない(恩恵も受けていない)多くの自治体や住民までも、大変な苦難を伴う原子力防災への協力を国に求められているのです。

本来、天災と違い原子力災害は原発などの設計や立地によって災害の有無や程度を変えられるので、自治体や住民などに原子力防災などの苦難を強いる危険性の高い施設を国は認めてはならないのです。

元々(世界最大規模の発電所だった柏崎刈羽原発の近くに住んでいた経験から)、急に日々の業務や活動を中断して避難や屋内退避を準備・実行しなければならない、いつおきるかわからない原子力災害に備える負担とストレスは非常に大きいのです。人生の一大イベントがダメにされる恐れもあります。

しかし、国は原子力防災を自治体や住民などの負担や犠牲をより増やすものに、住民などを安全圏に避難させるより危険性の高い地域でも屋内退避(とその支援)を優先する方針に変える予定なのです。

そのことは、昨年実施されたパブリックコメント※の国が原子力防災における「屋内退避」の位置付けを明確にした文章案に分かり易く表現されています。屋内退避を継続するために必要な外出を含む危険性の高い活動を、一般住民などが実施・協力することを複合災害の場合でも求めるひどい内容です。

それというのも、半径30km圏内に10倍ほども拡大された原子力防災対象地域の住民などを避難させる計画の作成は難しく、実際、首都圏にある東海第二原発では原子力防災の実効性が問題になって運転差止めを命じる判決が出た影響もあるでしょう。屋内退避であれば形式上は計画ができるからです。

加えて、2024年(令和6年)元旦に能登半島地震が発生して、海岸隆起した震源付近が珠洲原発建設予定地だったことで、複合災害時の原子力防災の実効性が改めて問題になりました。もし珠洲原発が建設されていて能登半島地震で原発事故も発生していた場合、地震で道路は寸断、住居などは全半壊して避難も屋内退避も不可能な最中に、多くの住民などが放射能にさらされることになったからです。

更に最近、豪雪で原子力防災用の道路が使えなくなった事例もあり、パブコメ案は複合災害の場合も言及していますが、対処は困難か不可能なので関係住民などの不安を解消できる内容ではありません。

以上、国の方針（パブコメ案）は屋内退避とその支援で住民などが被る苦難（被害・損失）を軽視する、複合災害時の原子力防災の諸問題も棚上げした、苦役を禁ずる憲法に抵触する内容だと思います。

※「防護措置としての屋内退避の考え方及びその運用について（案）に対する意見募集について（案件番号 198025205）」2025年（令和6年）11月6日、原子力規制委員会

参考リンク：「避難計画を案ずる関西連絡会」の上記パブコメ関連の批判的資料

<https://www.jca.apc.org/mihama/bousai/pubcomme20251122.pdf>

### 3. 第31回 JJS オンライン読者会に参加して

「日本の科学者」1月号のJSA福岡支部読書会は、1月号に掲載された編集委員会によるインタビュー記事【「市民と科学者を結ぶ」ためにいま必要なこと ―宮本憲一氏に聞く】の宮本憲一さんをゲストに招いて行われた第31回 JJS オンライン読書会（「日本の科学者」編集委員会主催）に参加することに置き換えました。会は、2月7日（土）の14時から2時間50名以上の参加で、宮本さんの「日本の科学者」の記事を補足する形での1時間以上の講演が主な内容でした。自らが主に公害に対する市民運動・社会運動に関わってこられた実体験・経験に基づくお話で、感銘を受けかつ考えさせられる内容でした。

宮本さんは、「日本の科学者」1月号のインタビュー記事では語るができなかった2つの点について話をしておきたいとして、アスベスト被害に対する取り組みを十分に行えなかったこと、日本の食糧自給率の低さと都市と農村との関係についての提言を中心にお話しされました。

1点目のアスベスト問題については、1980年代にアメリカに留学する前から問題は認識していたが、アスベストを扱う労働者にとっての労災的な問題としか捉えていなかったと初期の認識の甘さを悔やんでいると話しを始められました。留学中にアメリカでのアスベスト訴訟で訴えられた被害の深刻さを知り衝撃を受け、またセルコフ教授から日本でのアスベスト問題の調査を促されたが、十分に取り組みなかったことを後悔したと話されました。アスベストの実際の被害が数年後に健康被害が現れるというもので、それが明確になるまでは建築基準としてアスベストの使用が推奨されているような状況であったため、これほどまでに広範で甚大な問題になるとは予測できず、帰国後に現地調査を行わなかったことが悔やまれたそうです。そのお話の中で、海外の研究者との国際的な協同、情報の交換・共同研究が重要であることも強調されました。

日本におけるアスベストの問題については、日本では海外の事例に対する見識の不足等もあって、規制の遅れと危機感の欠如が問題であったと指摘されました。特に、大きな災害のたびに建造物の多くの構造からアスベストが飛散し、救助活動にあたった人々にまで被害が出ていることから、今後も、自治体の調査やその結果の地図上への情報の集積が不可欠であると提言されました。また、沖縄の米軍基地でもアスベストが大量に使用されているが、調査や情報公開が不十分で周辺住民にも被害が出ており重大な問題であるとの指摘もされました。

2点目の日本の食糧自給率の低さと都市と農村との関係については、最初に、ヨーロッパの都市ではその近郊の農村部を含めて各都市圏内で食糧の自給を確保するという伝統的な考えがあることを紹介されました。それが、多くのヨーロッパの先進国では食糧の自給率が70%を越えていることの基盤にあることを強調されました。それに対して、日本の食糧自給率が

38%と先進国の中では突出して低いことは重大で、ドイツやイタリアのように都市と農村の共生を政策の原理に据えるべきだと提言されました。

尤も、この問題は戦後の日米の関係と高度経済成長政策によって農業を切り捨ててきた日本政府の政策の生み出した問題で、その方向転換にあたって、宮本さんの提言は基本的な考えとしてはその通りなのですが、とても一朝一夕ではすすまない取り組みになるだろうと感じました。

お話の全体を通して、宮本さんは、科学・技術とその産物を含めての社会実装にあたっては、これまでの人類の経験から学んで新しい科学や技術の産物の含む負の側面にも注視し、科学者が本来持っている国際的連携から得られる知見も取り入れ、早い段階から市民と協力して予防原則に基づく取り組みをする必要性を強調されました。

(報告者：小早川義尚)

#### 4. 第3回 AI 問題研究会のご案内

<AI の現状と問題を、メンバーが得た情報や体験を踏まえて話し合う>

JSA 福岡支部ではこれまで2回 AI 問題研究会を行いました。しかし、AI 関連の分野を専門とする支部会員もいない状況では、AI 技術の原理等について研究を深めることは荷が重く、今後はAI の急速な社会への普及に伴う様々な問題について検討することを研究会の主眼とすることにしました。

そこで、第3回となる AI 問題研究会は「AI の現状と問題を、メンバーが得た情報や体験を踏まえて話し合う」をテーマに、下記のようにオンラインで開催します。

研究現場におけるAI の急速な普及、教育の現場におけるAI の活用と規制の問題、自律型AI 同士によるSNS の試行 (AI は自我を持ち得るか?)、AI の社会活動への普及と問題、AI の軍事利用・・・と様々な問題が考えられます。これらの問題に興味のある会員の皆さんの参加を呼びかけます。

#### JSA 福岡支部第3回 AI 問題研究会

テーマ : AI の現状と問題を、メンバーが得た情報や体験を踏まえて話し合う

日時 : 2月28日(土) 14:00~16:00

様式 : Microsoft Teams を利用したオンライン会議 (アクセス情報は次の通り)

Web からのアクセス情報 :

<https://teams.microsoft.com/meet/45041525767303?p=AEQs1AQpwd2cfxYBXP>

Microsoft Teams からのアクセス情報

会議 ID: 450 415 257 673 03

パスコード: Qx6Dc2UZ

## 5. 第56回日本科学者会議（JSA）福岡支部定期大会のお知らせ

日程だけの予報になりますが、第56回日本科学者会議(JSA)定期大会を下記の要領で開催します。会員の皆様には予定に入れておいてくださるようお願いいたします。  
例年通り、定期大会終了後には、公開の講演会か談話会を計画する予定です。

### 【第56回日本科学者会議（JSA）福岡支部定期大会】

日 時：5月17日(日)13:30～

様 式：Microsoft Teams を利用してのオンライン会議

## 6. (エッセイ) 『トルコの旅より』 (河内俊英)

9月中旬トルコに12日間の旅行に行きました。阪急企画の旅行でホテル9泊、機中泊2日の中国上海経由・イスタンブール往復でした。全食事つきで中国の高圧的なチェックを除けば、これまでツアー旅行にはあまり参加したことの無い、河内にとっては、中々快適な旅でした。

参加者全員1人参加で全員が今回初めて顔を合わせた9名は、9月14日日曜日に福岡国際空港に集合して出発しました。河内が最高齢で79歳、75歳代が他に2名、60歳代以上5名、1人だけ30代が居ました。男性2名いずれも75歳以上、他は女性7名でした。自己紹介もないままの出発になりました。上海でのチェックが当然か??非常に厳重でやかましく感じました。中国でテロがあったわけでもないのに心配なようです。中国の飛行機は中国がこれだけ発展してからは初めてだったのと、海外に行く飛行機だったので厳重で、うるさかったのかもしれない。高市首相発言が問題になっている今なら、もっと厳しくなっているのかもしれないですね。

トルコは親日的な国で紀元前の遺跡がゴロゴロ存在する国でした。日本とトルコの関係は1890年のエルトゥールル号事件：和歌山県串本町沖で遭難したオスマントルコの軍艦エルトゥールル号乗組員を献身的に救助したことがきっかけです。

遺跡は復元したものが殆どですがギリシャの神殿遺跡のような石柱が沢山ありました。しかし、日本の弥生時代にこれ程の遺跡があったことは、驚異的なことであり、トルコにこれ程多くの遺跡の存在することを始めて知りました。日本で良く知られるカッパドキアの遺跡は、火山性の岩石が風化して残った所を加工したもののようです。日本の中世鎌倉時代に十字軍に責められたとき、立てこもって何か月も生活したとのことで、ベトナムの「ベトコンが米軍相手に地下洞窟で闘った」のに似ている気がしました。

トルコはイスラム国ですが、キリスト教の教会なども破壊することなく、そのまま手直しして、モスクとして使っているようです。この点は、キリスト教国と大きく違うように感じました。キリスト教国では、異教徒の造ったイスラム寺院等はすべて破壊してしまったようである点で大きく異なっています。

カッパドキアの目玉は、洞窟ホテル宿泊と気球に乗って上空から奇岩群を見る事でしたが、生憎の気象条件でダメでした。早朝現地まで行ったのですが、直前の上空の風の強さで中止

になりました。4月・5月と9月のこの時期は、気球に乗れる良い時期と言う事でしたが、今年の9月は連続7日飛んでいないとのことで残念でしたが、次回を目指したいものです。トルコは日本と同じ火山国であり、地震が頻発する国です。火山性の岩石がゴロゴロあります。富士山以上の4千メートル近い山があり、トルコ富士的な形の高山がありました（写真1）。



〈写真1〉

エルジス山は高さが3916mの成層火山で、カッパドキアの奇岩はエルジス山に由来し宿の窓からすぐ見える山です。この山は5月から10月は登山でにぎわい、11月1日から5月1日まではスキーで有名とのことです。

雨は年間総雨量が600ミリ前後で、場所によっては6～9月全く降雨無しとか言っていました。日本の国内の雨の少ない地域の半分くらいと少雨の国です。トルコの観光のベストシーズンは、温暖で過ごしやすい4～10月です。一方、トルコは日本と同じように四季折々の魅力があるため、1年中ベストシーズンと言ってもよいと言われていますが、カッパドキアの気球の冬は寒そうです。

雨が少ないので穀物生産は専ら麦類で、コメは作っていないようです。しかし農産物生産は豊富で、野菜と果物は毎回の食事で豊富に出ました。また生野菜が毎回多く出され、オリーブオイルと酢をかけて食べるようです。日本人の添乗員が気を使って、日本のドレッシングを2種類準備してくれたのでより食べやすくなりました。生野菜として「トマトとミニトマト、キャベツ、ピーマン、青物、ニンジン等」が出てきました。果物はスイカとメロン、モモ、リンゴ、ブドウ数種が出てくる、まだ青いミカンもある・・・出始めのようだった、バナナは輸入品とかで、少しだけ出されていました。トルコでの日本のミカンと同じような手でむけるミカン生産は、貴重で欧州では好評と聞きました。

観光地では、ザクロ、パイナップル、オレンジ等の生ジュースがあちこちで売られています。レストランだと1200円位ですが街中では400円位と手ごろで安く手に入ります。カンボジアなどだと街中のジュース類は病気が怖くて飲めないのですが、トルコは大丈夫なようです。

イスラムの関係から豚肉は無く牛肉と鶏肉・七面鳥と魚が中心でしたが他にマトンがあるようです。近年は、養殖のマスとサケが多くあるらしく最近では日本にも輸出されているようです（写真2）。身近な所で見られた魚は、イスタンブールで観光客が沢山通行する橋の上から釣り糸を垂れて釣るサバなどです。多くの釣り人が20～30メートルの高さから釣り糸をたらしめて釣っていました。全長約500メートルのガラダ橋は、橋の上からの釣りでも有名な橋です。



〈写真2〉

マス料理は川沿いの地域で有名とのことですが、近年は養殖が盛んで、我々の様な観光客の昼食に出されました。

観光の主な見どころは、紀元前の遺跡と宗教遺跡でしたが、イスラム寺院の文化とオスマン帝国がらみの財宝が博物館に多数ありました。発掘された石の彫刻も多数展示され楔形文字もありました。楔形文字で書かれている内容の紹介では、借金の証書でした。いつの時代にも金の貸し借りがされているようです。

お土産は色々ありましたが、観光客のサイフを狙った店に案内されました。革製品の衣服1着20万円単位やペルシャ絨毯も10万円単位、国宝級と言う陶磁器も高いが、お金持ちの観光客は見分けがつくようでした。しかし、狙った客は口説いて買わせていたようです。貧乏性の河内、また断捨離中の妻が待つ我が家では、縁の無いモノでしたが、9名中の4~5名は買っていました。

トルコの電力事情は、ロシアからの天然ガス、石炭等の火力発電が40%以上と中心的で輸入に頼っていますが、近年水力、地熱、風力、太陽光などの再生可能エネルギーが増加しています。トルコ政府は、再生可能エネルギーの割合を2030年までに30%まで引き上げることを目指しており風力・太陽光・地熱などの導入拡大を進めています。またロシアの支援で原発建設計画がありますが、予定より遅れています。完成すれば最大10%を賄う予定のようです。

世界の三大料理は、一般的にフランス料理・中華料理・トルコ料理を指し、トルコ料理が選ばれるのは、広大なオスマン帝国時代に宮廷でアジア・ヨーロッパ・中東の食文化と食材が集約・発展し、世界に影響を与えた歴史的・地理的背景が理由です。ケバブやヨーグルト、豊富な野菜や肉・魚介類、香辛料が特徴であり、東洋と西洋の食文化が融合した奥深さが魅力的でした。